

# 日本語エヴィデンシャルの歴史の変遷：構文化的アプローチ

楊 文江 (南開大学)

ywjw@hotmail.com

近代語のエヴィデンシャル (evidentials) には「ヨウ」「ゲ」「ソウ」「ラシイ」「ミタイ」「ッポイ」などがある。「ヨウ」は中古の名詞「ヤウ」が文法化したもので、「VP+ヨウダ」は典型的な「人魚構文」である (角田 2011)。一方、「ゲ」と「ソウ」は名詞に由来すると見られるが、そのエヴィデンシャル的な用法が形容詞的接尾辞から発展してきたのが明らかとされている。「ラシイ」と「ッポイ」も同じく名詞接続から節接続へ拡大されると同時に、エヴィデンシャル的意味を獲得した。「ミタイ」は「Nヲ見タヨウ」構文がいくつかの形態・音韻変化を経て成立したものである。「ゲ」はさらに Haspelmath (2004) の言う「萎縮」(retraction) が起こり、現在に至っては生産性を失った接尾辞用法しか残っていない。世界諸語のエヴィデンシャルを見渡せば、下表で示すような変遷経路が未だに報告されていないようである (Cf. Aikhenvald 2011)。

【表】 五つのエヴィデンシャルの歴史の変遷

	ゲ	ソウ	ラシイ	ミタイ	ッポイ
S	中古か中古以前	15 世紀頃	中世	1880 年頃	近世中期以前
S-E <sub>1</sub>	中世前期	中世末期	近世後期	20 世紀前半	1980 年代
S-E <sub>1</sub> -E <sub>2</sub>	中世末期	近世中期	20 世紀初頭		
S-E <sub>2</sub>	1700 年頃	1870 年代頃	E <sub>1</sub> は現在の話し言葉で消えつつある		
S	1800 年頃				

(S = Suffix (接尾辞) ; E<sub>1</sub> = Enclitic (前接語/推定) ; E<sub>2</sub> = Enclitic (前接語/伝聞))

「S>E<sub>1</sub>」は「接語>接辞」という文法化のクラインと逆方向であることから、楊 (2014) では脱文法化の事例と見られている。さらに、次の例における「ミタイ」のほかに、「ソウ」「ラシイ」「ッポイ」にも独立用法が発展してきた。

【例】「あれ、女ですよね」「みたいだな」(『OUT』2002)

「接尾辞>前接語>独立用法」という変化は統語スコープの拡大を伴っている。しかし、Shinzato (2007) などが指摘するように、統語スコープの縮小が必ずしも文法化の決定的な要素であるとは限らず、むしろ文法化と呼ばれる日本語の歴史変化には統語スコープが拡大する事例が多々ある。そうだとしたら、上で示した日本語エヴィデンシャルの歴史の変遷は一方向性の仮説の反例と言えるか否かという疑問が生じてくる。

本発表では、Traugott & Trousdale (2013) が提案する構文化 (constructionalization) の枠組みを用いてこの変化を再分析してみる。構文化の仮説は、縮小としての文法化と拡大としての文法化という正反対に見える二つの理論モデルを調和させ、従来文法化に関わる難題の解決に新たな知見を提供している。